

豊かな看護

千葉県
八千代市

看護小規模多機能型居宅介護

まちのナース
ステーション八千代 **むすんでひらいて**

地域包括ケアでは、人々の自立や意思決定を支える暮らしの中で支えていくことが大切です。本連載は、そうした看護師職能Ⅱ領域における豊かな看護実践を3回にわたって紹介します。

自宅での生活を支えるために

都心近郊に位置する千葉県八千代市。市内の住宅街の一角にある一軒家が、看護小規模多機能型居宅介護（看多機）「まちのナースステーション八千代 むすんでひらいて」だ。統括所長の福田裕子さんは、2011年に訪問看護ステーションを立ち上げ、がんや難病など中重度の利用者や介護に疲弊する家族と接してきた。その中で抱くようになった「看護師がバックベッドを持って、療養者・家族のQOLが上がる」との思いを体現し、15年に看多機を開設した。

看多機は訪問看護、訪問介護、通い、宿泊を一体的に利用できるのが特徴だが、福田さんは「その人の自立性を保ちながら、自宅中心の生活ができるように精いっぱい関わる」と語り、

宿泊サービスを多用せず自宅での暮らしを支えることを重視する。利用を検討する本人・家族には、必要最小限のサービスを提案しつつ、急変時や看取り期などはしっかり対応することを説明し、納得と信頼を得る。一方で、地域のサポート資源を共に検討したり、自立性を高めるケアやリハビリテーションを提案するなど、在宅生活の限界点を上げるケアと暮らしの在り方をデザインしていく。

例えば、脳出血で気管切開をして退院し、定期的な吸引が必要、意思疎通は困難ということで受け入れたAさん。アセスメントして自力で排痰できることを確かめ、吸引の機会を減らし、機能回復に向け働き掛けた結果、約3年たつ今では文字盤を使って意思疎通ができたり、歩行訓練に励むなど予想以上の回復を見せている。ほかにも、状態が良くなる利用者は少なくない。看多機を「卒業」し、より軽度者向けのサービスに移行した人もいる。

風通しの良い組織・地域を目指して

「むすんでひらいて」では、働きやすい環境づくりにも力を入れる。腰痛予防のノーリフト（持ち上げないケア）の考えに基づき、移乗・移動にはリフト機器やスライディングシートを活用。利用者宅に、福祉用具として機器を導入するよう提案する場合もある。

円滑な多職種連携、チームケアの手段も試行錯誤してきた。「情報共有できているかどうかケアの質が違ってくる」と福田さん。全スタッフにタブレット端末を支給し、タイムリーな情報共有にはチャット機能を利用。対面での報告や申し送り以外にも、各自が帰宅前に、ボイスレコーダーに録音して情報共有する方法も



通いの利用者とスタッフがりビングに集まった昼食前のひととき（後列右が福田さん）

取る。話し手の考えや価値観が反映され、書式に沿って書かれた記録では得難い利用者の様子を捉えられるのが利点だ。

組織形態も工夫し、スタッフ間に役職や職階は設けず、風通しの良いフラットな組織を目指す。その中であって、統括所長であり看護職の福田さんは、個々のスタッフの自主性に任せながら、時に示唆したり後押しするサーパントリーシップを発揮したマネジメントに力を注ぐ。

風通しの良さを目指す活動は、地域にも向けられている。福田さんが介護福祉士の資格を持つ夫・光宏さんと運営する母体法人の株式会社まちナースは「医療福祉事業を通して、地域住民の健康的な生活の支えとなり笑顔あふれる健やかな地域（まち）づくりに貢献する」との理念を掲げる。看多機や訪問看護といった公的保険サービス（公助）を提供するとともに、療養者・家族の自助や互助・共助が機能する地域をつくらうと、集いの場としてコミュニティカフェを開いたり、住民とのネットワークづくりにも熱心だ。地域を結び、地域に開かれた場にしたいと名付けられた「むすんでひらいて」も、その名にふさわしい拠点として、今日も街角で存在感を放っている。



施設概要 職員構成：看護師（常勤4・非常勤3）、理学療法士（常勤1・非常勤2）、ケアマネジャー（常勤1）、介護職（常勤2・非常勤12）
／登録定員24／利用者の平均年齢72歳／利用者の平均要介護度3.2